

# 看護学生が基礎看護学実習を通して体験した ヒューマンケアリングの分析 ；実習目標の違いによる比較

Experience of “Human Caring” in the Clinical Practice of Fundamental Nursing;  
Comparisons of Students’ Perspectives before and after Modifying the Objectives.

吉武 美佐子<sup>1)</sup>  
Misako Yoshitake

星 美和子<sup>1)</sup>  
Miwako Hoshi

藤川 真紀<sup>1)</sup>  
Maki Fujikawa

吉野 拓未<sup>1)</sup>  
Takumi Yoshino

西田 裕子<sup>1)</sup>  
Yuko Nishida

## 要旨

〔目的〕2年次の基礎看護学実習における実習目標や内容の変更により、学生のヒューマンケアリング体験にどのような相違があるのかをレポート内容の比較により分析する。

〔方法〕基礎看護学実習において「体験したヒューマンケアリング」というテーマで書かれ、2015年度と2016年度に提出されたレポートをテキストマイニングの手法を用いて分析した。分析ソフトには、Text Mining studio Ver.6.1（数理システム）を使用した。

〔結果〕2015年度及び2016年度の基礎看護学実習で共通していたのは、患者とコミュニケーションをとる中で体験したヒューマンケアリングであった。2015年度は、主に清潔の援助やコミュニケーションを通じた場面で、かつ自分の実践したことからの学びに偏るのに対し、2016年度は、自分の体験に留まらず看護師のシャドーイングによる看護場面の客観的な観察からも学びを得ることができていた。

〔考察〕2015年度の学生は、患者との直接的な関わりからヒューマンケアリング体験を捉えているが、2016年度の学生は多岐に渡る様々な体験からヒューマンケアリングを考察していた。2016年度の学生は、「ヒューマンケアリング」を場面として感じ、それが何であるのかを考え言語化しようと試みることで、概念としても捉えようとしている姿が窺えた。

〔結論〕基礎看護学実習における「ヒューマンケアリング」概念の考察という点においては、モデリング（シャドーイング）は有効であることが改めて確認できた。

キーワード：基礎看護学実習、ヒューマンケアリング、看護学生

<sup>1)</sup> 福岡女学院看護大学

## Abstract

〔Purpose〕 The purpose of this study was to investigate similarities and differences in experience of “human caring” in the first clinical practice of fundamental nursing from the perspective of two different groups of nursing students from year 2015 and 2016, respectively. Specifically, we attempted to identify characteristics of “human caring” experience of the students before and after modifying objectives and learning activities of the clinical practice.

〔Methods〕 The data were abstracted by short essays of students describing about what they experience “human caring” in their clinical practices. We used a software named Text Mining Studio (Ver.6.1) to analyze Japanese word frequency, dependency structure of sentences, and distinctive expressions used in essays of each group.

〔Results〕 The results of analyses obtained through Text Mining revealed that both groups of students mentioned “human caring” experience in communicating with patients. In-depth analysis implied that the students of 2015 found “human caring” from the scenes of their own clinical

experience, and the students of 2016 found “human caring” from various scenes of not only what they actually did for patients but also what they observed the way professional nurses provided care for patients.

〔Discussion〕 The students of 2015 associated “human caring” with their experience of directly interacting with patients, while the students of 2016 found “human caring” in many different clinical experiences such as communicating with and teaching patients in addition to providing patients care. It seemed that the students of 2016 were more likely to conceptually consider “human caring” than those of 2015.

〔Conclusion〕 Findings of this study indicated that modification of objectives focusing on shadowing and observing professional nurses would be an effective teaching approach for nursing students to feel and ponder “human caring” in clinical settings.

---

Keywords: the clinical practice of fundamental nursing, human caring, nursing students

## I. 緒言

A看護大学では、「建学の理念である、キリスト教の愛の精神に基づき、ヒューマンケアリングを実践できる看護職の育成」という教育目標のもとに、ヒューマンケアリングに繋がる独自の教育内容を実現している。文部科学省（2011）が発表した「学士過程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」の中にも、ヒューマンケアの基本に関する実践能力が掲げられており、ヒューマンケアリングを実践できる看護職者の育成は大学教育に期待されているといえる。しかしながら、現代の学生の気質として「助け合い、人を思いやる」「相手の気持ちを察する」などの道徳的観念の希薄化や人とのコミュニケーションが表面的であることから（箕浦,高橋,2013）、相手の気持ちを理解することが難しく、気持ちにより添えずに対人関係がうまく築けないといった傾向がある。

安酸（2011）は、ケアリングを教育する場合、哲学的な概念を講義で教えるだけではなく、演習や実習のなかで身体を通じた経験として教える必要があると述べていることから、実習は実践を通してケアリングを体得できる重要な機会であると考える。A看護大学においても、学生は、1年次前期に「ヒューマンケアリング論Ⅰ」でケアリングに関する基礎的な概要及び患者に寄り添うことと自己成長との関係について概念的に学び、2年次前期に基礎看護学実習での体験からヒューマンケ

アリングについての考察を行っている。更に、2年次後期の「ヒューマンケアリング論Ⅱ」では、この実習体験を理論を用いて振り返り、ヒューマンケアリングについてより深く考える機会を設けている。

基礎看護学実習は、学生にとって初めての臨地実習であり、日常生活行動の観察やコミュニケーションを通して、患者の状況を理解し快適な療養生活を営むために必要な援助を実践する能力を養うための実習である。2015年度までのA看護大学の基礎看護学実習では、主な焦点を「学生自身が看護技術（主に清潔の援助）を患者に実践し評価することとし、看護技術の実践を通してヒューマンケアリングを考察するレポート作成を課題としていた。しかし、実習中の患者への技術の実践では、多くの学生が強い緊張に陥り、「自分自身が看護技術を遂行すること」のみに集中し、実践中の患者の反応や思い、更にはケアリングを体現している看護師の対応や声かけなどに気付く余裕のない傾向が課題としてあがった。また、学生の課題のために、時には、患者に必要なない清潔の援助提供を強いる場面も発生し、2年次後期の「ヒューマンケアリング論Ⅱ」において実習を振り返った学生から、自身のケア提供が患者を尊重しニードを重視したものであったのかを疑問視する状況が発生した。そのため、2016年度より「患者へ提供されているケアや看護を、看護師のシャドーイングを通して学ぶ」ことへ焦点を変え

実習目標及び実習内容を変更した。実践を伴う看護におけるケアリングの教育方法としてモデリング（シャドーイング）は、学生が、多くのケアする人をモデルとして見ることで、ケアする人としての意識が自然にもてるようになるとともにケアする人として成長していく（安酸,2011）と言われているため、この方法を取り入れることで、学生がよりヒューマンケアリングを意識することが可能になるのではないかと考えた。

学生が実習で体験したヒューマンケアリングを調査した研究はいくつか見られるが、その多くは3・4年次生を対象としてアンケート調査や半構成的面接を行ったものであり（木村,杉山,2012;山下ら,2005;山田ら,2013）、2年次生を対象としたものはなく、更に2年次生が初めての实習後に、自分なりにヒューマンケアリングについて考えてまとめたレポートを分析対象としたものや、2年次における基礎看護学実習目標変更に伴う相違を比較した研究は見当たらなかった。

そこで、本研究では、基礎看護学実習における焦点及び実習目標や内容の変更により、学生のヒューマンケアリング体験にどのような違いがある

のかを学生レポートの比較により分析することを目的とした。またその分析から、学生が得た学び、実習の評価と今後の課題並びに基礎看護学実習の在り方についても検討したいと考える。

## 用語の定義

ヒューマンケアリングとは、患者が健康を快復し、また人々が自己成長できるようケアするだけでなく、相手をケアすることによって自らも自己成長できるという、相互主観的なものと本研究では操作的に定義する。なお、ケアリングと同義語として扱う。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 研究デザイン:量的記述的研究

### 2. 研究期間:2018年8月~2019年10月

### 3. 研究対象:A看護大学で2015年度（106名）と2016年度（108名）に行われた2年次生の基礎看護学実習において、実習後に提出した「体験した

表 1 2015年度及び2016年度の基礎看護学実習の概要・目標・内容

	2015年度	2016年度
実習概要	患者の日常生活行動の観察やコミュニケーションを通して、健康障害によって生じる変化が患者の日常生活行動にどのような影響を及ぼすのか、患者の療養生活を観察し、患者が快適な療養生活を営むために必要な援助を実践する能力を養う。また、援助を通して患者との相互的な関係性及びヒューマンケアリングについて考察し、看護専門職者としての基本的態度を養う。	変更なし
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生活者としての日常生活行動（主に清潔）を理解する。</li> <li>2. 看護技術の原理・原則に基づき日常生活行動の援助計画を立案できる。</li> <li>3. 患者の安全・安楽・自立・個別性を考慮しながら援助が実施・評価・修正できる。</li> <li>4. 患者とのコミュニケーションや日常生活援助を通して、患者との関係性について考えることができる。</li> <li>5. 看護専門職者としての倫理観に基づいた行動ができる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 看護の対象となる入院患者の療養環境を知るとともに、健康障害によって生じている変化及びその変化が日常生活に及ぼす影響について説明できる。</li> <li>2. 患者との援助的人間関係を形成するためのコミュニケーション技術について考察する。</li> <li>3. 看護師の行動の見学及び可能な看護ケアへの参画から、安全なケアの提供や患者を尊重した態度について考察する。</li> <li>4. 実習体験からのヒューマンケアリングと今後の自己の課題について考察する。</li> <li>5. 看護学生としての自覚および責任ある行動や態度を習得する。</li> </ol>
実習内容	学生自身が看護技術を患者に実践し評価する。	患者へ提供されているケアや看護を、看護師のシャドーイングを通して学ぶ。

「ヒューマンケアリング」のレポート

#### 4.基礎看護学実習の概要

A看護大学における基礎看護学実習は、2年次前期に配置され、学生にとって初めて経験する臨地実習である。2015年度と変更後の2016年度の実習概要及び実習目標・実習内容の主な変更点を表1に示す。実習期間は5日間であり、学生は1名の入院患者を受け持ち、実習を行う。

#### 5.方法

基礎看護学実習において「体験したヒューマンケアリング」というテーマで書かれ、2015年度と2016年度に提出されたレポート（A4用紙2枚）のうち、同意の得られた対象者のレポートのみを分析した。

#### 6.分析方法

分析は、テキストマイニングの手法を用いて集計した。テキストマイニングという手法は、文字（テキスト）という質的データを、多変量解析などを用いた量的方法で分析する手法であり、質的なテキストデータに基づいたうえで、統計的手法を用いる量的な分析である（小平ら,2010）。分析ソフトには、Text Mining studio Ver.6.1（数理システム）を使用した。このソフトウェアは、テキストマイニングによる量的な分析結果から質的データを参照できる機能（原文参照機能）を備えていることが特徴であり、量的結果と質的結果を同時に参照できる。分析は、それぞれの実習ごとに基本情報、単語頻度分析（単語の出現回数）、係り受け頻度分析（単語と単語のつながりの頻度）を行った。さらに、実習目標や実習内容の異なる実習のヒューマンケアリング体験を比較し、学生の学びについての概観を得るために、特徴表現抽出（属性ごと、特徴的に出現する係り受け表現を抽出する）を行い、原文参照により2つの基礎看護学実習の特徴を分析した。

#### 7.倫理的配慮

対象者には、文書と口頭で研究の目的や意義、

データは匿名で処理され個人が特定されることはないこと、研究への協力は自由意思に基づくものであり、基礎看護学実習の単位認定や成績評価は既に終了しており、研究に協力しなくても、一切影響はないことを説明した。また、研究に同意をした後でも、途中撤回が可能であり撤回した場合も不利益はないことについても説明し、同意を得た。

なお、本研究はA看護大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（No.17-2）。

### Ⅲ.結果

#### 1.対象

研究に同意が得られ、分析対象となったレポートは、2015年度が94件（回収率88.7%）、2016年度が80件（回収率74.1%）であった。レポートを書いた対象者は、全員女性であった。

#### 2.基本情報

2015年度の学生レポートの平均行長（文字数）は2,172.9字、延べ単語数は41,005単語、2016年度の学生レポートの平均行長（文字数）は1,661.4字、延べ単語数は26,403単語であった。

#### 3.単語頻度分析

レポートに出現した単語の出現回数について、抽出設定を、名詞・動詞・形容詞・形容動詞とし、レポート内に同じ単語が重複して出現する場合もカウントは1件として分析した。

2015年度及び2016年度の学生レポートの単語

図1 2015年度 単語頻度分析上位10位 (n=94)

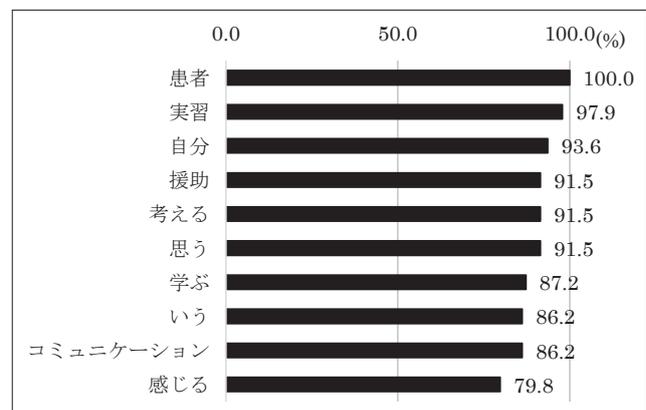
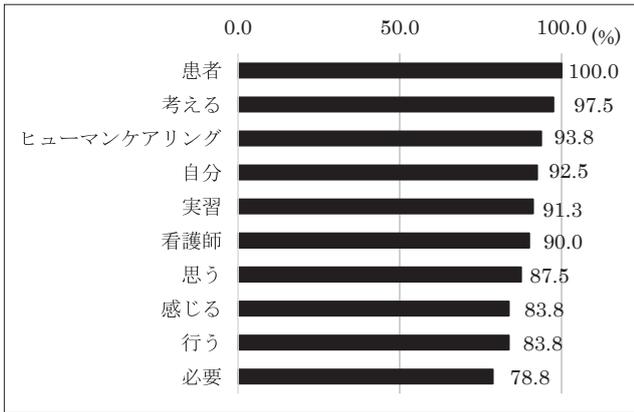


図2 2016年度 単語頻度分析上位10位 (n=80)



頻度分析結果の上位10位を図1・2に示す。2015年度は、「患者」「実習」「自分」「援助」「考える」「思う」「学ぶ」等が多く、2016年度は、「患者」「考える」「ヒューマンケアリング」「自分」「実習」「看護師」「思う」等が多く抽出された。2016年度に3番目に多く出現した「ヒューマンケアリング」は75件 (93.8%) であったのに対し、2015年度では20位63件 (67.0%) であった。

#### 4. 係り受け頻度分析

レポートに出現した係り受け、つまり単語と単語のつながりの頻度について分析した。抽出設定は、単語頻度分析と同様に、名詞・動詞・形容詞・形容動詞とし、レポート内に同じ係り受けが重複して出現する場合もカウントは1件とした。

2015年度及び2016年度の学生レポートの係り受け頻度分析結果の上位10位を図3・4に示す。2015年度は、「援助-行う」「患者-コミュニケーション

図3 2015年度 係り受け頻度分析上位10位 (n=94)

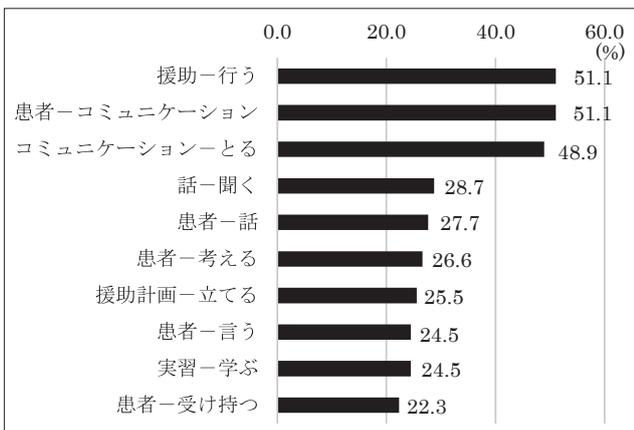
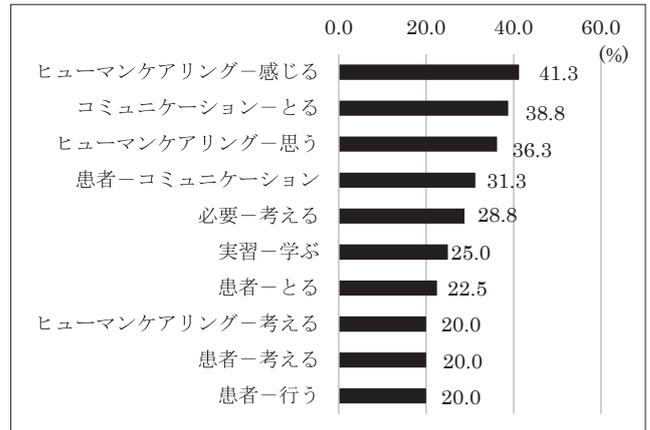


図4 2016年度 係り受け頻度分析上位10位 (n=80)



ーション」「コミュニケーション-とる」「話-聞く」「患者-話」等が多く、2016年度は、「ヒューマンケアリング-感じる」「コミュニケーション-とる」「ヒューマンケアリング-思う」「患者-コミュニケーション」「必要-考える」等が多く抽出された。2016年度では1位33件 (41.3%)、3位29件 (36.3%)、8位16件 (20.0%) と出現頻度の多かった「ヒューマンケアリング」に関する係り受けは、2015年度においては、「ヒューマンケアリング-考える」が95位の7件 (7.4%) であった。表2・3に2015年度及び2016年度の係り受け頻度分析結果の上位5位の原文を一部示す。

#### 5. 特徴表現抽出

特徴表現抽出では、2015年度と2016年度に特徴的に出現する係り受け表現を抽出した。2015年度と2016年度の学生レポートの特徴表現抽出結果の上位10位を図5・6に示す。2015年度は、「援助-行う」「援助計画-立てる」「清潔-援助」「個別性-考える」「情報-得る」等が多く、2016年度は、「ヒューマンケアリング-感じる」「ヒューマンケアリング-思う」「必要-考える」「ヒューマンケアリング-考える」「課題-考える」等が多く抽出された。つまり、係り受け頻度分析結果で抽出された以外の特徴表現としては、2015年度は「援助計画-立てる」、「清潔-援助」、「個別性-考える」、「情報-得る」等、2016年度は「ヒューマンケアリング-考える」、「課題-考える」等であった。

2015年度に係り受け頻度分析結果で抽出され

表 2 2015年度の係り受け頻度分析上位5位の原文一部

係り受け	原文
「援助-行う」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人ひとりの患者にあった援助を行うことが必要である</li> <li>・援助を行う際に麻痺側に負担がかからないようにするには、どのようなことを心掛ければよいか考えた</li> <li>・うまく援助を行うことは難しいかもしれないが患者を思いやる気持ちがあれば、患者にもそれが伝わり、良い関係が生まれるのだと感じた</li> <li>・しっかり患者さんのことを考えていること、尊厳を尊重し、かけがえのない一人の人間として援助を行い、コミュニケーションをおこなっていけば、患者さんにも伝わることが実感できた</li> <li>・シャワー浴が終わると、更衣室で「さっぱりした。ありがとう」と笑顔で言っていた。この援助を行わせて頂いてよかったと感じた</li> <li>・援助を行うことで、患者との相互的な関係、係わり合いの中で、信頼関係を構築できることがわかった</li> <li>・援助を行うなかで会話もするが、援助を行うときは個別性を重視した計画を立てる。この個別性がヒューマンケアリングであると感じるようになった</li> <li>・ヒューマンケアリングのなかでの『かわりを通し癒し、癒される関係』になるということを目指して援助を行いたいと思っていた</li> <li>・患者の信頼を裏切らないためにも、できる援助を一生懸命に行うように心掛けた</li> <li>・看護師は患者に何が必要なのかを見分け援助を行う</li> <li>・どの援助にも行う根拠があり、それを明確に分かっていないと真の援助ができない</li> <li>・実際に手を触れて気持ちを込めて援助を行うことはとても大事な事と感じた</li> <li>・患者にとって必要な援助を行うことで患者は身体的に満たされ、患者が望んでいる援助をすることで精神的に満たされると学んだ</li> <li>・援助を行ってうまくいかなかった</li> </ul>
「患者-コミュニケーション」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回の実習で学んだヒューマンケアリングで、一番大きく感じたことは、患者とのコミュニケーションをとり、良好な関係など信頼関係を作ることだ</li> <li>・患者の生活や人となり、疾患への不安を聞き出せるように毎日時間を見つけては声かけをしに病室へ行った</li> <li>・患者とコミュニケーションをとる中で、信頼関係の構築と、コミュニケーション技術について身につけ、学ぶことができた</li> <li>・患者とのコミュニケーションの中で、より良い信頼関係を築くことがお互いにとって癒し、癒される関係に発展していくのではないかと考えた</li> <li>・患者さんとのコミュニケーションの中から患者さんの不安を上手く聞き出し、その不安を感じさせないように援助するというのを援助計画の立案に踏まえれば、個別性のある援助を行うことができると学んだ</li> <li>・患者とのコミュニケーションのなかで、たくさんの情報が得られることを学んだ</li> <li>・患者とコミュニケーションをとっていく中でだんだんと患者のことが分かった</li> <li>・患者とコミュニケーションをとり、よくアセスメントすることが看護をしていく中でとても大事なのだということを学んだ</li> </ul>
「コミュニケーション-とる」	「患者-コミュニケーション」と同様の内容
「話-聞く」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者の気持ちになったり理解しようという姿勢で話を聞いたりすると、ただ話を聞くだけの時よりも患者の気持ちを読み取りやすくなり、理解しやすくなりすることが分かった</li> <li>・唯一私にできたことは、患者のベッドサイドに行き話を聞くことである</li> <li>・患者さんの話を聞くことしかできなかったけれど最後には患者さんにありがとうと言ってもらえた</li> <li>・患者の話を傾聴・共感の姿勢をもって聞くことを自分の中の目標としていた</li> <li>・話を聞く姿勢・共感・うなずき・あいづち・繰り返し・非言語的なことなど自分が本当に患者の話を聞きたい、自分の意思を伝えたいということ、これらの動作に入れていくと本当に相手に伝わるのだと感じた</li> <li>・何も出来なくても病室にいる時間を増やし、ただ傍にいて話聞くこと、私自身も心を開き笑顔で接することで患者も不安な気持ちや悩みを自然に言ってくれるようになった</li> </ul>
「患者-話」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者の話にうなずきや相槌をいれ耳を傾けることで患者が心を開いて、信頼関係の構築につながるということを学んだ</li> <li>・援助計画を立案する中で患者にとって病気で変化したことは何なのか、患者の話に耳を傾けて理解することに努める必要があると学習した</li> </ul>
「患者-考える」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者が今どのようなことを考えているのか、何を訴えたいのか、コミュニケーションを構築する中で読み取り、患者にとって少しでも快適な生活を送ることができるよう援助することが患者の気持ちを尊重し共感することであると考える</li> <li>・患者を第一に考える</li> <li>・患者のためにと考えながら一生懸命に行う</li> <li>・患者の方のことを考え援助計画を立てると、自然と根拠や患者の方の個性は出てくることも学ぶことができた</li> </ul>

注) 原文において「看護師」のことを記載している文には波線を入れた。

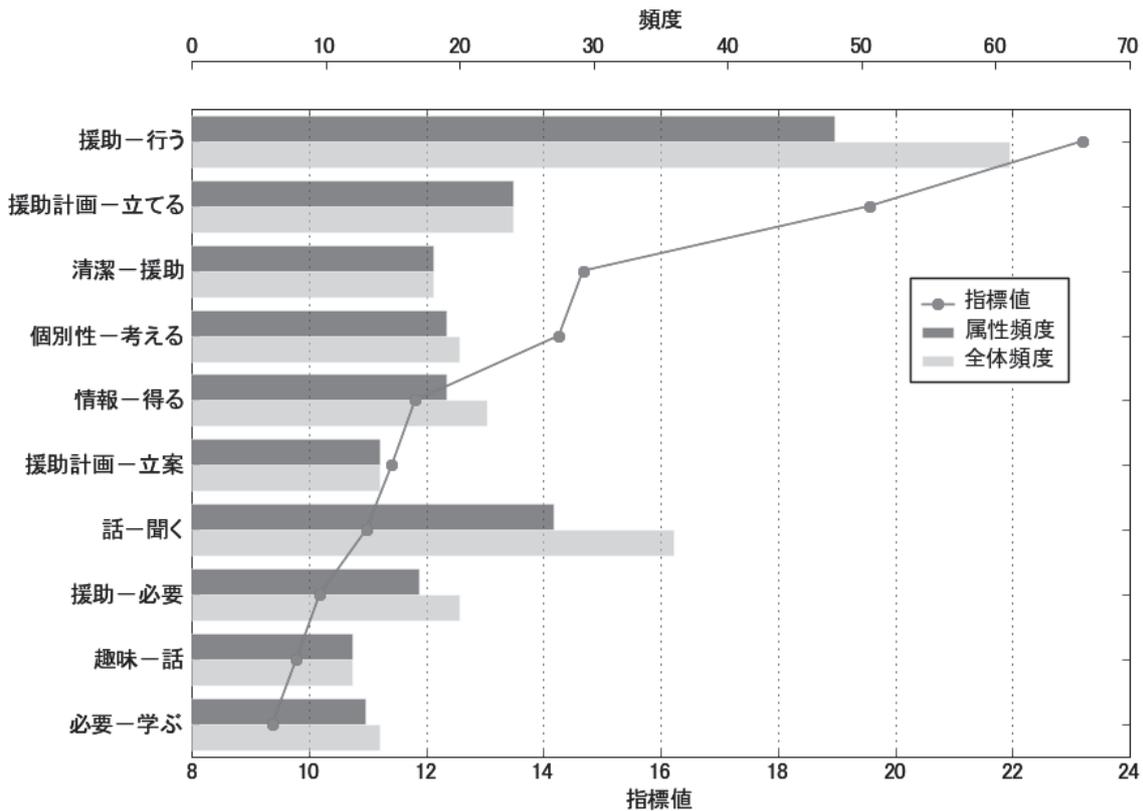
表 3 2016年度の係り受け頻度分析上位5位の原文一部

係り受け	原文
「ヒューマンケアリング-感じる」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・退院後もみてこれから先、生きていく上で患者さんが満足な暮らしができるよう、自立を促すことがヒューマンケアリングであると感じた</li> <li>・シャワー浴時に出来る限りのことは患者さん一人で行えるように見守ったこともヒューマンケアリングを感じた</li> <li>・清潔ケアの際、<u>看護師</u>が患者さんの努力を認め、意欲を高めるような声かけをしていて、ヒューマンケアリングだと感じた</li> <li>・ヒューマンケアリングであると感じたことは、患者さんの病態に合わせたケアを考え行うことと、実際にそのケアを行うことを、この実習を通して私たちが考え、実践していくことであると考えた</li> <li>・<u>看護師</u>が患者の不安を共感した後に、アドバイスや薬かけをして不安を取り除いている姿があり私にとってヒューマンケアリングだと感じた</li> <li>・相手の立場に立って考えることで、その人が必要としているケアに近付き、喜んでもらったことがヒューマンケアリングだと感じた</li> <li>・<u>看護師</u>が患者から必要な情報を聞く際の接し方や対応、姿勢が患者の性格や個性に合わせており、信頼関係ができていたことがヒューマンケアリングだと感じた</li> <li>・<u>看護師</u>は、治療後は発熱や治療部位の激しい痛みがあったためニードを見極め、苦痛に対する看護を行っており、ヒューマンケアリングだと感じた</li> <li>・ヒューマンケアリングだと感じた事は、<u>看護師</u>が、シャワー浴の際、あえて手を出さず、安全に配慮しながら見守りつつ本当に援助が必要な時に援助を行っていたことである</li> <li>・患者の苦しみを感じとり、受け入れること、患者の話に耳を傾け、傾聴することが患者のエネルギーや前向きな姿勢に変わること、対象者の成長を通して自分自身の成長につながるものがヒューマンケアリングだと感じた</li> <li>・患者に清拭などの個別のケアが提供できたことにより相互関係を築けたのでこの体験をヒューマンケアリングであると感じた</li> <li>・ヒューマンケアリングだと感じたものは、生活習慣の見直しを患者が主体となって行おうとしている場面の<u>看護師</u>との関わりの中である</li> </ul>
「コミュニケーション-とる」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・たとえマイナスな発言があったとしても否定はせずに傾聴することが大切だ</li> <li>・<u>看護師</u>は、患者の言葉について耳を傾けて、患者の気持ちをくみ取ろうとしていた ただ会話をするだけではなく、患者のことを理解し共感することが大切だ</li> <li>・<u>看護師</u>が患者と向き合ってコミュニケーションをとっているの強い信頼関係・あたたかな関係づくりができていたと感じた</li> <li>・患者のニーズに応えることができる</li> <li>・患者を患者とみるのではなく、一人の人間としてみて、一人ひとりの性格や個別性を大切にしている</li> <li>・患者がどのようなケアや援助を求めているのかをかかわりの中で知る</li> <li>・情報収集することだけでなく、相手との信頼関係を築くことにもつながる</li> </ul>
「ヒューマンケアリング-思う」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分でできることは自分でやるからこそ患者も成長できるし、<u>看護師</u>もこの患者はここまでできるからこんなケアにしようと思えることができるし学べるからこそ成長につながる。そういったケアをヒューマンケアリングだと思った</li> <li>・<u>看護師</u>が、患者に意思のあるひとりの人間であることを尊重し、尊厳ある人間として思いやりを持って接している姿を見て、ヒューマンケアリングだと思った</li> <li>・ヒューマンケアリングだと思ったことは、<u>看護師</u>が患者の退院後の自立を一番に考えて看護をしている<u>看護師</u>の姿だ</li> <li>・患者の不安を少しでも取り除き、健康を守り、癒しを与えることができた。また、私自身看護する立場として、ただシャワー浴で患者さんの体を清潔にするだけでなく長期の入院生活による症状がないかきちんと確認することが大事だと学び成長することができたので私は、この体験がヒューマンケアリングだと思った</li> <li>・ヒューマンケアリングと思った体験は、コミュニケーションをとることによって、患者のことを知り考えることで、患者のことを尊重して関わることができると<u>看護師</u>の行動から感じたことである</li> <li>・ヒューマンケアリングだと思った場面は、患者の些細な言動から考えられる思いをくみ取り、患者の思いに寄り添えるような看護を<u>看護師</u>が行っていたことだ</li> <li>・ヒューマンケアリングであると思ったのは、シャワー浴時に<u>看護師</u>が患者のプライドや自尊心を傷つけず、かつ安全面にも配慮した声かけをしていたことだ</li> <li>・ヒューマンケアリングであると思った体験は、患者の退院後の不安を解消する方法を患者と共に考慮したことである</li> <li>・「ヒューマンケアリング」と思ったのは、清拭や食事をする際に、患者のその日の体調や意欲など患者のペースに合わせて援助していくという場面である</li> <li>・<u>看護師</u>が患者自身で行えることを考えながら食事前に環境整備を行っていた</li> </ul>

係り受け	原文
「患者-コミュニケーション」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ただおしゃべりをするのではなく患者の背景やどういう性格なのかを知った上で看護につながっていく</li> <li>・共感・分かち合いの姿勢を大切に、その結果お互いに成長する結果につなげることでできる援助をしていきたい</li> <li>・患者の抱えている不安を引き出すためには、きちんと傾聴し患者に安心感を与え、ただ聞くだけでなく、患者の抱えている不安を解消するための方法の提案などが重要だと学んだ</li> <li>・コミュニケーションを図ることで自分もそして患者も成長することができたと感じた</li> <li>・回数を重ねるごとに患者さんの症状から気持ちまで、深く聞くことができ、患者との信頼関係を築くことができた</li> </ul>
「必要-考える」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者が成長するためにどうしたらよいか考える</li> <li>・寄り添い心の声を聞けるようなコミュニケーション能力が必要であると考え</li> <li>・看護技術に対する正しい知識と技術が必要であると考え</li> <li>・患者にどのような援助が必要かをじっくり考えた</li> <li>・看護師の姿を見て、患者の性格や認知レベル、自立度からその患者に何が必要なかを考え、かけがえのない存在として尊重し、1人1人を大切にされているからこそ個別性のある看護が実践できるんだと思った</li> <li>・疾患についての知識が必要と考える</li> <li>・ここをもっと深く聞いたほうが患者の不安が明確になるのではないかと気づく力も必要になると考えられる</li> <li>・相手と同じ気持ちになることが必要であると私は考える</li> <li>・患者の信頼を得ること</li> </ul>

注) 原文において「看護師」のことを記載している文には波線を入れた。

図 5 2015年度 特徴表現抽出上位10位 (n=94)

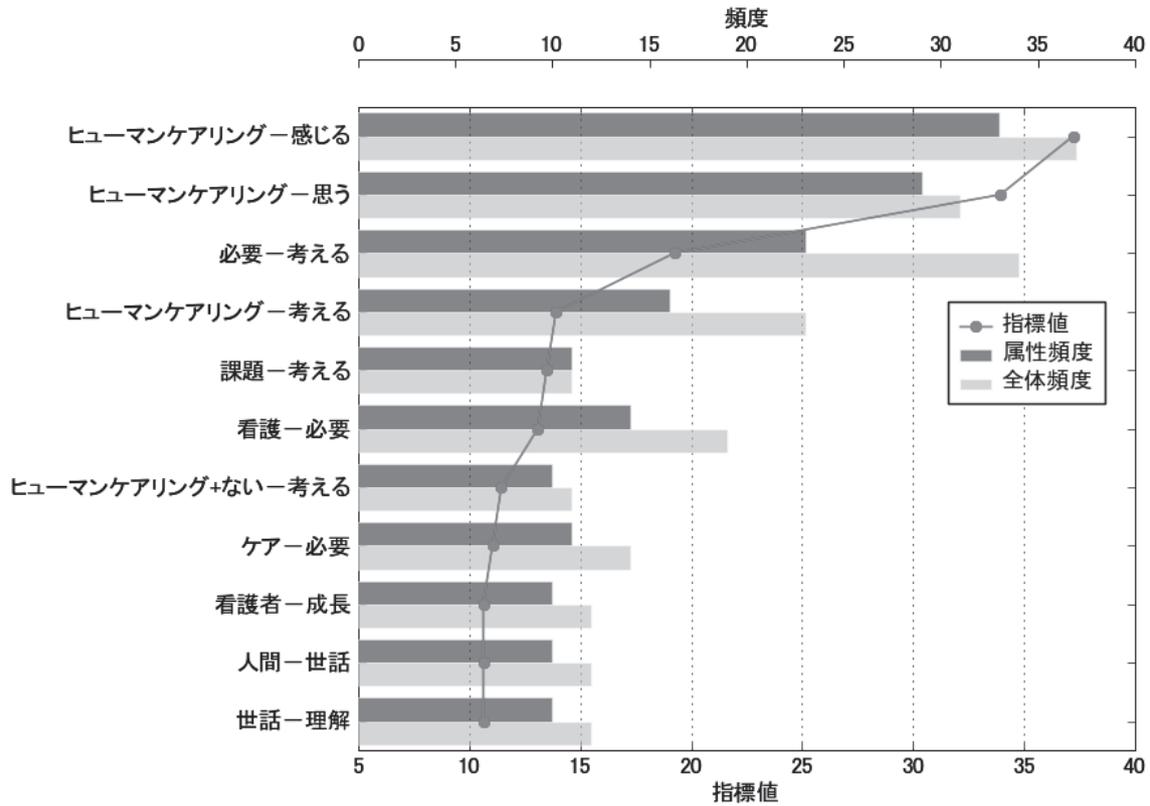


注) 指標値とは、特徴語表現抽出で全体の頻度と属性ごとの頻度をもとに抽出指標となる統計量を求めたもので補完類似度によって算出したものである。属性頻度とは2015年度に出現した頻度、全体頻度とは2015年度と2016年度に出現した頻度の合計を指す。

た以外の特徴的な係り受けである「援助計画-立てる」の原文を参照すると、「患者の成長の妨げにならないように、患者の安全、安楽に考慮し、患者が自立して行えることは自分でしてもらうな

ど患者が成長できるように立案した」「患者の意見を尊重し、一人一人の個別性に応じた援助計画を立てることがヒューマンケアリングであると学ぶことができた」「患者にあった援助計画を立て

図 6 2016年度 特徴表現抽出上位10位 (n=80)



注) 指標値とは、特徴語表現抽出で全体の頻度と属性ごとの頻度をもとに抽出指標となる統計量を求めたもので補完類似度によって算出したものである。属性頻度とは2016年度に出現した頻度、全体頻度とは2015年度と2016年度に出現した頻度の合計を指す。

ることの大切さを学んだ」「援助計画を立てるときは、看護者側の視点のみで考えるのではなく、患者側の視点になって考えることが患者にとってより良い援助を提供することが出来るということを改めて学んだ」「援助計画を立てるにあたっては、患者が成長できるように立案した」という内容であった。「清潔-援助」では、「清潔の援助を中心に看護を学んだ」「今回の実習ではコミュニケーションを取ることと清潔の援助を行うことが目的であった」「清潔の援助は、身体の状態を観察したりするのも大事ということを学んだ」「清潔の援助の選択は患者のニーズに合わせて決めることを学んだ」という内容であった。「個別性-考える」では、「個別性を考えることでヒューマンケアリングを体験できた」「個別性を考えた援助について学ぶことができた」「ヒューマンケアリングはコミュニケーションのことだけでなく、患者の疾患、年齢、性格、好みなどの個別性を考えた看護の援助をすることでもであると学ん

だ」「個別性を考えることはヒューマンケアリングの『看護を必要としている人々を慈しみ、かけがえのない人間として世話をし、気づかい、理解し、支えること』というところにつながっているということを感じた」という内容であった。「情報-得る」では、「情報を得ることで患者に合った援助計画を立てることができた」「カルテや患者との会話、患者の観察から情報を得ていった」「人間関係を築くことでよりその人を知ることができる情報が得られると学んだ」「たくさんの情報を得ようと質問を繰り返し、共感できていなかった」という内容であった。

2016年度に係り受け頻度分析結果で抽出された以外の特徴的な係り受けである「ヒューマンケアリング-考える」の原文を参照すると、表3に示す係り受け頻度分析における「ヒューマンケアリング-感じる」「ヒューマンケアリング-思う」の原文と同様の内容であった。「課題-考える」では、今後の課題として「コミュニケーション能

力」「知識をつけること」「ケアリング能力」「看護援助技術を磨くこと」「患者の状態や検査結果からアセスメントできるようにすること」「目的をもってケアを行うこと」が書かれていた。

#### IV. 考察

##### 1. 2015年度の学生のヒューマンケアリング体験

2015年度の基礎看護学実習では、受け持ち患者に学生が主に清潔の援助を実践し評価することが主な焦点であった。そのため、「援助-行う」という表現が多くみられていた。原文を参照すると、学生が未熟な自分の技術を自覚しつつも、誠心誠意患者に向き合い、援助を行おうとしている姿勢や、その一生懸命な気持ちが患者に伝わり、信頼関係を築くことに繋がったことを感じていた。また、援助を行うことで得られるタッチングの効果や身体的だけでなく、精神的にも患者を満たすことができることも学んでいた。次に多かった表現は、「患者-コミュニケーション」「コミュニケーション-とる」「話-聞く」「患者-話」であり、コミュニケーションに関するものであった。原文から、患者の情報収集の手段としてコミュニケーションを取ることで患者理解を深め、その情報を援助に活用する中で、信頼関係を築くことができていた。また、既習のコミュニケーション技術である傾聴・うなずき・相槌・共感を用いて患者の悩みや不安な気持ちを理解したいと努力をしていた。そして、今の自分ができることは患者の話聞くことであると感じ、患者の傍らで誠実に話を聞いている姿があった。

2015年度の基礎看護学実習の目標は、「看護技術の原理・原則に基づき日常生活行動の援助計画を立案・実施・評価・修正ができる」ことや「患者とのコミュニケーションや日常生活援助を通して、患者との関係性について考えることができる」であった。その目標達成のため、教員及び臨床指導者は、学生が立案した援助計画を基本に、個別性や自立を強調して指導を行っていた。その実践内容から、何が大切であるかを学生は捉えて学びとしてレポートに記載しているものの「ヒ

ューマンケアリング-考える」という係り受けを表現していた学生は1割に満たなかったことから、援助技術の実施や患者とのコミュニケーションを通して「ヒューマンケアリング」とは何であるのかを概念的に考え表現している者は比較的少なかったことが明らかになった。

##### 2. 2016年度の学生のヒューマンケアリング体験

2016年度の基礎看護学実習では、看護師のシャドーイングを通して患者へ提供されているケアや看護を学ぶことが主な内容であった。多かった表現として、「ヒューマンケアリング-感じる」「ヒューマンケアリング-思う」などがあり、ヒューマンケアリングとは何かを感じ考えるきっかけとなった場面について捉えようとし、なぜそれがヒューマンケアリングであるのかを真摯に考えている様子が窺えた。原文をみると、書かれている場面は、清潔ケアや環境整備、食事の援助、退院支援、治療後の看護、患者の表出した不安や思いへの対応など多岐に渡っており、2年次の学生では独立して実践することのできない場面においても看護師のシャドーイングを通して学びを得ることができていた。具体的には、表3の「ヒューマンケアリング-感じる」「ヒューマンケアリング-思う」の原文に「看護師」と記載のある文章から、患者の不安に共感しアドバイスや言葉かけをして不安を取り除くこと、治療後の発熱などの状況から必要なケアを考え提供すること、患者の退院後を考え自立を促すこと、看護師が患者をひとりの人間として尊重した姿勢で寄り添う看護をしていたこと、安全面への配慮をした声かけをしていたことなど、看護師の多様な実践の観察を通してヒューマンケアリングを感じ表現することができていた。他に多かった「コミュニケーション-とる」「患者-コミュニケーション」では、原文から、患者とコミュニケーションをとることで、患者の思いやニーズを把握し看護につながっていくこと、患者の気持ちをくみ取り共感することで信頼関係を築くことができること、患者も自分も成長できることなどを感じていた。「必要-考える」では、原文より、患者の気持ちを理解するた

めのコミュニケーション能力や患者にあったケアを提供するための知識と技術など、看護職者として、ヒューマンケアリングを実践するために必要なことを考察していた。

木村,杉山(2012)の看護学部3年次生を対象とした調査では、臨地実習におけるヒューマンケアリング体験には、教員や臨床指導者のモデリングとしての行動が影響していたことが明らかになっている。2016年度の基礎看護学実習の目標は、「看護師の行動の見学及び可能な看護ケアへの参画から、安全なケアの提供や患者を尊重した態度について考察する。」こと及び「実習体験からのヒューマンケアリングと今後の自己の課題を考察する。」であったことから、教員や臨床指導者がより「安全なケア提供」「患者を尊重した態度」及び「ヒューマンケアリング」をすべての実習の側面において、意識して指導や支援をしていたことが窺えた。

### 3.2015年度と2016年度の学生のヒューマンケアリング体験の比較

2015年度及び2016年度の基礎看護学実習で共通していたのは、患者とコミュニケーションをとる中で体験できたヒューマンケアリングであった。患者とのコミュニケーションについての考察は、両年度とも実習目標になっており、学生は、患者とのコミュニケーションを通して信頼関係を築くことを実感し、信頼関係の構築がヒューマンケアリングであると感じていた。コミュニケーションをとることの目的は、相互の発するメッセージの意味や感情の理解を深め、相互に信頼できる関係性を築くこと(茂野,2018)であり、基礎看護学実習においては、多くの学生がその目的を達成もしくは達成に近づくことができたと考える。また、今留ら(2018)の調査では、2年次の臨地実習では、患者と良好な援助の人間関係を築けるよう、コミュニケーションの基本要素に重きを置いて関係形成を試みていたことが報告されており、A看護大学の学生も本実習では基本的なコミュニケーション技術を用いて患者との関係性を築こうとする同様の傾向が見られていた。

2つの実習で違いがみられたのは、レポートの課題でもある「ヒューマンケアリング」という単語の出現率であり、単語頻度分析において2015年度が67.0%であるのに対し、2016年度は93.8%と、2016年度の方が多く出現していた。さらに、特徴表現抽出を用いて、2つの実習を比較するとそれぞれの特徴がより明確になった。

2015年度では、係り受け頻度分析結果で抽出された以外の特徴表現として、「援助計画-立てる」「清潔-援助」「個別性-考える」「情報-得る」があり、原文より、患者の性格や疾患、自立度、ニーズなどの個別性に合わせた援助計画を立案し実施することが患者の成長につながり、ヒューマンケアリングであること、そのためには、患者からの情報収集が必要であることを学んでいた。2015年度の基礎看護学実習では、対象者の状態に応じた日常生活援助を思考するプロセスの中から、ヒューマンケアリングについて考察することをねらいとしていた。そのため、学生は、自分自身の日常生活援助提供体験やその際の看護師からの助言により、患者の個別性を考慮した援助が患者の成長や自分の成長につながることをヒューマンケアリングであると捉えていた。

一方で、2016年度の基礎看護学実習では、考察2で述べたように看護師のモデリングを通してのヒューマンケアリングであるため、場面が多岐に渡り、退院支援など看護学生としては実践ができない内容を観察することから得られた考察も多く含まれていた。また、看護師と患者との関わりを見学する中で、専門職としての看護師とそれを目指す立場の自分との違いに気付く契機となったことも窺え、特徴表現として「課題-考える」が抽出されていた。自らが実践した体験から見つけた課題に留まらず、看護師のシャドーイングを通して、看護師がどのように患者に接し、患者のニーズを明らかにしているのか、更にそのニーズに配慮した上で、疾病の予防や管理、患者の心身の安寧、自立や機能の最大化へ向けて、的確で安全なケアをどのように提供しているのかについて学びを得ており、看護師としての実践というものを具体的にイメージできたことで見出された課題で

あったと考える。実習におけるシャドーイングの効果の1つとして、新たに看護職の職業アイデンティティを得られることが挙げられているように (von der Lancken & Gunn, 2019)、臨地実習におけるシャドーイングは、看護職の役割を、観察を通して理解するとともに自分の目指すロールモデルを見出し、それに向けた自分自身の課題が明確になることで、看護学生としての自覚を促し、今後の学習や成長への動機付けになることが示唆された。

本実習のレポート課題の主題であるケアリングは、講義で論理を教示するだけでは理解が難しく、演習や実習などの実際の経験を通して教育することが有効であると指摘されている (安酸, 2011)。A看護大学におけるこの基礎看護学実習は初めて臨床で身体を通じた経験としてケアリングを学ぶ機会である。2015年度・2016年度の2つの実習とも学生は体験的にヒューマンケアリングを学んでいたが、その学びには違いがあり、2015年度は、主に清潔の援助やコミュニケーションを通じた場面で、かつ自分の実践したことからの学び、つまりより具体的で個人体験としての表現に偏る傾向があるのに対し、2016年度は、自分の体験に留まらず看護師の客観的な観察からも学びを得て、その学びをより抽象化して表現する傾向が見受けられた。

看護における知識の発展過程において、概念について、ただ単に実践から出てきた考えを述べるのではなく、それが何であるのかという本質を捉え直そうとし、どうしてそう考えるのかを論理的に思索する、所謂、哲学的な思考が必要であることは言及されている (Chinn & Kramer, 2017)。2016年度の学生は、2015年度の学生と比較して、自身の体験のみならず観察した場面から「ヒューマンケアリング」とは何であるのかを捉え直し、そしてなぜそう考えるのかを論理的に言語化しようと試みており、その結果として、表現の抽象度が高まり、定義的になる傾向が見受けられた。つまり、ヒューマンケアリングという概念を初歩的ではあっても哲学的に捉えようとしている姿が窺えた。

清潔の援助等に代表される日常生活援助技術は、精神運動性のスキル (psychomotor skills) であり、ある目的のために神経と筋肉をうまく協働させる必要のある複雑な活動であると言われており (Gaberson & Oermann, 1999/2002)。また、精神運動性のスキルは単なる技術ではなく、その実施にはケアリングやクリティカルシンキング及び問題解決思考等を必要とすることから、無意識のうちに技術を円滑に実施できるまで習熟させることなしには、学生は患者やその周囲へ注意を向けることができないことも指摘されている (Oermann, Shellenbarger, & Gaberson, 2018)。したがって、2015年度の学生にとっては、その複雑なスキルである清潔の援助を安全に患者に提供することで精一杯の状況であることが容易に予想でき、個人の体験以上のこと、つまり看護師の声かけや実践だけではなく、場面における「ヒューマンケアリング」を考えること自体が困難であった可能性が高い。

千田ら (2015) は、2年次の臨地実習において、学生自身の技術が未熟で、思うように援助が行えなかったとしても、看護師の実践する看護から、看護援助には安全・安楽・自立・個性が必要であることを学んでいたと報告しており、2016年度のA看護大学の学生も同様に看護師の実践の観察からの多くの学びがあったことが推察される。また、看護実践教育のアウトカムの一つとして挙げられる「理論や概念をいかに適用するかという知識」の修得 (Gaberson & Oermann, 1999/2002) 及び授業や演習で学んだ理論を臨床実践へ移行する (Oermann, Shellenbarger, & Gaberson, 2018) のためには、モデリング (シャドーイング) は有効であることが改めて確認できたと言える。

2016年度に変更した実習目標や実習内容によって、学生は実習体験からヒューマンケアリングをより抽象的・一般的に考えるとともに、職業アイデンティティを含む看護専門職としての基本的態度の修得にも効果があったと思われることから、基礎看護学実習として一定の学習効果は得られたと評価する。

本研究は、レポート内で出現頻度の多い単語や係り受けについて着目し分析をしているため、全対象の分析結果とは言い難いことが、研究の限界である。今後は、出現頻度が少ない単語などからの分析や質的な分析も行い、初めての臨地実習で体験するヒューマンケアリング及び体験からの学生の学びについて調査を行うことが課題である。

## V. 結語

A看護大学の2年次生が初めて経験する基礎看護学実習において、2015年度の清潔技術の実施を中心とした実習と、2016年度の看護師のシャドーイングを中心とした実習におけるヒューマンケアリング体験とその学びを比較し分析を行った。2つの実習とも学生は体験的にヒューマンケアリングを学んでいたが、2015年度は、主に援助やコミュニケーションを通じた場面で、かつ自分の実践からの具体的な学びに偏る傾向があった。一方、2016年度は、自分の実習体験はもとより看護師によるケア提供場面の客観的な観察からも学びを得ることができており、「ヒューマンケアリング」を感じる機会が増え、感じたことを抽象化し概念として哲学的にも捉えようとしている学生の姿が窺えた。また、看護師の職務や役割なども考察する機会が増えていた。

看護の高等教育においては、技術の実施を焦点とした実習構築はよく見受けられる。しかし、本研究成果から、実習中の精神運動性スキルの負担を軽減することで、体験からの概念的な思考をより促進し、かつ客観的観察力を高めるとともに、それによる職業アイデンティティの形成にも寄与できる可能性が高いことが示唆された。

## 謝辞

本研究に協力いただいたA看護大学生のみなさんに感謝いたします。

## 文献

Chinn, P.G., & Kramer, M.K. (2017). Knowledge Development in Nursing: Theory and Process.

- St. Louis, MI; Mosby
- Gaberson, K.B. & Oermann, M.H. (1999)/勝原裕美子監訳(2002).臨地実習のストラテジー.医学書院
- 今留忍,横森久美子,谷岸悦子他.(2018).臨地実習における看護学生のコミュニケーション能力の変化:縦断的調査による2年次と3年次との比較.東京家政大学研究紀要,58(2),5-14.
- 木村美智子,杉山敏宏.(2012).臨地実習を通して体験したヒューマンケアリングと課題.ヒューマンケア研究学会誌,4(1),9-15.
- 小平朋江,いとうたけひこ,大高庸平.(2010).統合失調症の闘病記の分析—古川奈津子『心を病むってどういうこと?:精神病の体験者より』の構造のテキストマイニング—.日本精神保健看護学会誌,19(2),10-21.
- 箕浦とき子,高橋恵(編).(2013).看護職としての社会人基礎力の育て方 専門性の発揮を支える3つの能力・12の能力要素.2-12,日本看護協会出版会,東京.
- 文部科学省.学士過程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標.2014-11-13.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/.../1312488\\_5.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1312488_5.pdf)
- Oermann, M.H., Shellenbarger, T., & Gaberson, K.B.(2018). Clinical Teaching Strategies in Nursing (5th Ed.). New York; Springer
- 千田美紀子,今井恵,松永早苗他.(2015).A看護大学の基礎看護学実習Ⅱにおける学生の学びの分析.聖泉看護学研究,4,47-54.
- 茂野香おる.(2019).系統看護学講座専門分野Ⅰ基礎看護学[2]基礎看護技術Ⅰ.20,医学書院,東京.
- 安酸史子.(2011).ケアリングをいかにして教育するか.看護研究,44(2),172-180.
- 山下貴美子,伏見正江,森越美香他.(2006).母性看護学臨地実習における学生のケアリング経験の探求.山梨県立看護大学短期大学部紀要,11(1),35-44.
- 山田美幸,津田紀子,前田ひとみ.(2013).看護学生が臨地実習におけるケアリング体験の意味をすすめる過程.日本看護学教育学会誌,22(3),1-12.

von der Lancken, S. & Gunn, E. (2019). Improving role identity by shadowing interprofessional team members in a clinical setting: an innovative clinical education course. *Journal of Interprofessional Care*, 33(5), 464-471